

水産の窓

サバ類の漁況と秋漁の予測

6 - No. 11
令和6年9月13日
茨城県水産試験場

1. 北部まき網サバ類水揚量の推移と資源状況

北部まき網によるサバ類水揚量は、加入尾数が極めて多かったH25年以降、H28年に30.7万トンまで増加しましたが、H29年からは減少傾向となっています。特にR4年からは記録的な不漁が続いており、R5年の水揚量は3.0万トンと過去最低となりました(図1)。

マサバ資源量は、現時点ではまだ比較的高い水準にあると考えられますが、成長や成熟の遅れが見られており、今後の減少が懸念されます。

まき網によるサバ類の水揚量が減っている要因として、

北からの冷たい親潮が弱まっていることや、R4年秋以降、南からの暖かい黒潮続流が沿岸に近づき三陸沖まで北偏したこと等の海洋環境の変化が挙げられています。これら海洋環境の変化により、マサバが道東沖から主漁場となる三陸～常磐沖へ南下する経路が沖合化したり、回遊時期の遅れや漁期の短縮化が発生していると推測されます。

2. 秋漁の漁況予測

R4年秋以降、北偏が続いている黒潮続流の一部が今年5月に切り離され、9月上旬現在、暖水塊として三陸～道東沖に停滞しています(図2)。また、東北海域では黒潮続流は岸から離れるとともに、北端部はやや南下しています。このように海況に若干の変化は見られていますが、暖水塊と北偏している黒潮続流がサバ類の南下に悪影響を与えている状況に大きな変化はないと考えられます。

これらのことから、今年秋漁(9月～12月)のまき網漁場は、10月までは道東～三陸北部海域、11月～12月は三陸北部～常磐海域に主に形成されると予測されますが、魚群の南下は前年同様極めて遅れる可能性があります。また、来遊量は三陸海域では低調であった前年並、犬吠崎沖～常磐海域では前年を下回ると予測されます。市場調査での体長組成や年齢査定の結果から、漁獲される魚体の主体は、マサバ体長23～36cm(体重120～550g、2歳以上)で、20～28cm(70～230g、1歳魚)も見込みです。

ただし、今後暖水塊の沖への移動や黒潮続流の北偏傾向が解消した場合、来遊状況が好転する可能性もあり、今後の海況が注目されます。(回遊性資源部 荒井)

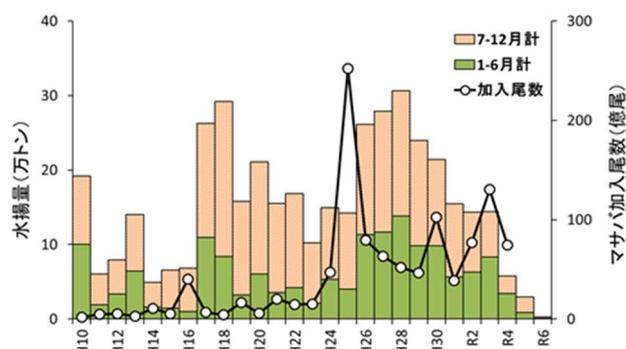


図1 北部まき網サバ類水揚量とマサバ資源加入尾数(令和6年水揚量は8月分まで)

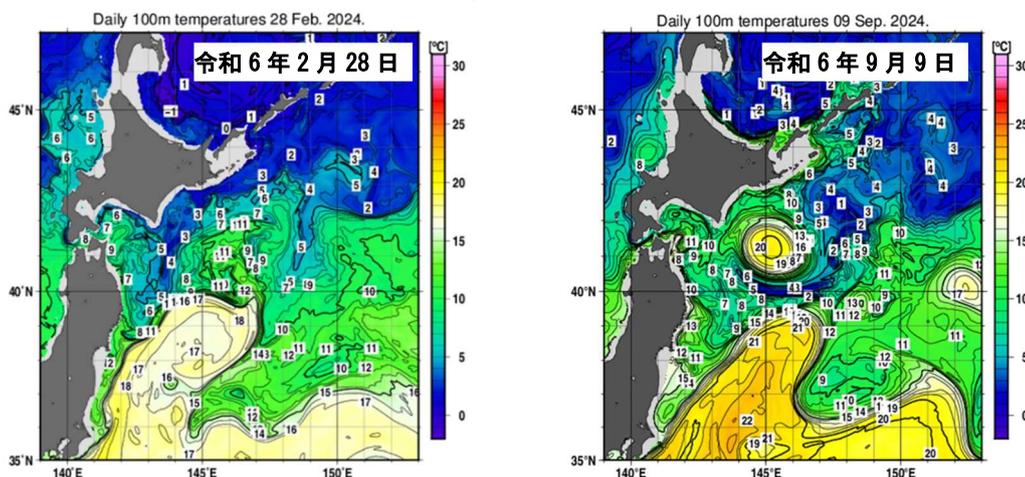


図2 R6年春季と9月現在の海況の比較(100m深水温、気象庁HPより引用)
(左:令和6年2月、右:令和6年9月)